第五章　さよなら

1.

「ゆうちゃんのお腹の中には、赤ちゃんがいるよ」

低い落着いた声で祖父がそう言ったときのことを思い出すと、陽は未だに、心の動揺が甦る。背筋を滑り落ちるように寒気が走った。

誰との子かは、自分が一番よく知っている。

頭の中が真っ白になった。目の前が、奇妙な色に見えた。何も話せなくなった。

まともに息も出来なくなった。

齋夜の様子はあまり憶えていないが、伝えたときも、大して慌てているようには見えなかった。困った風でもなかったと思う。そう、とだけ言ったのだったか。

別に彼女の人間が出来ていたわけではない、と陽は思う。齋夜はたぶん、興味がなかったのだ。せいぜいがちょっと重い、面倒な病気にかかった、くらいのものだった。その態度は、陽が何度看病に来ても変わらなかった。齋夜は以前と同じように、陽を喜んで迎えた。

何の含みもなかった。

自分はこんなに怯えているというのに。

その姿を見て、陽は自分のことが、ひどくつまらない人間のように思えた。

自分と齋夜は、とてもよく似ている。こどもの頃から齋夜の考えることは、いつも手に取るように分かるし、きっと齋夜も、陽の気持ちが分かるのだろう。

だとすれば、今の二人の間の態度の違いは、要するに自分がつまらない世間の物事にとらわれているからに過ぎない。

実に、つまらない。

齋夜が家で倒れた、と聞いて、祖父を連れ様子を見に行った。全てはそ

の日から始まった。

細々（こまごま）したことは、みんな祖父がやってくれた。何しろ、島で最も信頼を置かれている大先生なのだ。何を隠したところで絶対に露見しない。誰にも疑われない。

中学校の先生たちに対しては、祖父が直々に伝えた。「祖母の面倒を見たり家事をしたりのあれこれで、元々弱かった身体が調子を崩した上に、精神的にも参ってしまった。よって許可を出すまで面会謝絶、絶対安静を保つため、当分は休学にさせる」もちろん他の島民たちにも、同じように話す。誰もが、無理もない、と納得した。祖父は、あながち嘘でもないだろう、と冗談めかして言った。陽は笑えなかった。

崇嗣、健太、弥生の三人にも、陽は嘘をついた。教室で話すと三人ともひどく心配して、見舞いに行くと言い出し、しまいにはひとみまでもがそれに加わって、押しとどめるのが大変だった。なにしろ口で止めるだけでは、こっそり勝手に齋夜の家まで行ってしまうかも知れないのだ。もうすでにお腹も膨らみだしている。見られたら終わりだ。祖父の言を強く繰り返して、辛うじてとどめた。

しかし、見られたところで何が終わるのだろうな、と陽は今になって思う。

堕胎できる可能性は、初めからなかった。年もまだ十五と若く、齋夜は体力もないから、こどもを産むのが危険なのは明らかだったが、しかしとにかくもう、気づくのが遅すぎた。

言われて改めて見て、すでに随分お腹が張っていたことに陽は気づいた。齋夜は小柄で元が痩せているので、少しずつの変化では、そうと意識して見ないと存外分からない。しかし、本来なら誰よりも先に気づくべきは陽である。毎日会っていたのに、陽は少しも考えていなかった。そうして、さらに自分を責めた。

齋夜はもちろん、自覚していただろう。どれだけそうした知識があったかは分からないが、体調を崩して動けなくなるぎりぎりまで我慢していたのだから、いくら齋夜でも自分に何が起きているのかは見当がつくはずだ。けれど、齋夜は黙っていた。毎日学校で陽と顔を合わせていても、何も言わなかった。

そしてそれがなぜなのかも、陽にははっきりと分かった。
言葉で説明できない感覚の部分まで理解できた。
だからつらい。
齋夜を苦しめたから、ではない。
なぜ、自分だけが苦しんでいるのだ。
齋夜自身は何とも思っていないのに。
何とも思っていないのは、表面上だけではなかった。無理をしているのではなく、本当に齋夜にとっては、どちらでもよいことのようだった。毎日陽は手伝いも兼ねて見舞いに行っていたが、齋夜はいつも、布団で静かに本を読みながら寝ていた。むしろ会いに行った時の方が、いつもより機嫌がよいくらいだった。中学に上がった頃からこのところ、あまり二人きりで話す機会が持てなかったので、齋夜は今の状況が純粋に嬉しかったのだろう。祖母の調子が悪くなってから暗くなりがちだった表情も、すっかり晴れた。よく笑い、楽しく話した。それは、陽も嬉しかった。
けれど、齋夜は一度もお腹の子のことには触れなかった。
まるで無視するかのように触れなかった。悪意があってのことではない。
齋夜はそんな人間ではない。
気にならなかったのだ。
齋夜にとって、それは大きな問題ではなかった。
そして一方で、陽は常に、不安だった。
こどものことを気にも留めない齋夜の気持ちが理解できないから、ではない。
完全に、理解できた。
自分だって本当なら怖れることはないはずなのに、それなのに自分は悩んでいる。怖れている。
それが、不安の素だった。
二人の間の、初めての相違だったのだ。
会う毎に大きくなる齋夜のお腹を見る度に、不安は大きくなっていった。
齋夜の様子を尋ねる人々に嘘をつく度、内面と外面の乖離が広がっていった。それを隠すため、陽は表情を消す。
恐怖と不安に蝕まれた無表情だった。

加えて、自分の嘘がまったく気取られないのである。誰に話しても、不信を抱かれることはなかった。怯えながら自分は話しているのに、みんなあっさりと騙される。またしても、自分はそつなくことをこなしているな、と思った。それも不愉快だった。

祖父が平生となんら変わらない柔和な笑顔で齋夜の病状を話しているから、皆安心しているのだろう。ありがたかったけれど、陽は初めて、祖父が分からなくなった。以前から理解できていたわけではない。初めて疑問を抱いたのだ。

祖父は一体、何を考えているのだろう。

悪意のない顔で堂々と嘘をつく。あまりに巧みで、あまりにしたたかだった。

陽は一度、胸の中で育つ罪悪感に耐えられなくなって、祖父に直接話したことがあった。自分はちゃんと責任を取って、自分のやったことを言うべきではないか、嘘をついて逃げたりせずに、正面から向き合わなくてはならないと思う、そう覚悟して言った。

すると、祖父は一言、

「なぜ？」

と問うた。

よく、分からなかった。

やがて、産まれる日が来た。

長年島で一人の医師だったこともあって、祖父はちゃんと心得があった。そろそろという時期になってからは、陽も家を抜け出して齋夜に寄り添っていたし、陽が学校に行っている間も、祖父がついていてくれた。陣痛が来たのは、学校が終わったちょうど夕方だった。陽はすぐに、家へ電話を掛けた。祖父はのんびりやってきた。そして始まった。

けれど陽は、その場所で齋夜と一緒にいることが出来なかった。

そのことに、未だに劣等感を抱いている。

齋夜は気にしていない。子が生まれてから、陽は齋夜にわざわざ謝ったけれど、何を謝っているのかよく分かっていない様子だった。たぶん、本心から構わないと思っていたのだろう。祖父もそれを責めることはなかっ

た。実際陽が立ち会ったところで何の役にも立てなかったろうし、気に病む筋のことではないのだろう。それでも陽は、強烈な劣等感を覚えた。

情けない。

思いの外お産は順調にいった、らしかった。祖父は処置を終えると、何の口出しもせずに帰っていった。言ったのはただ一言、

「自分らで、決めなさい」

それだけだった。その後祖父は、あの子のことについて何一つ言わなかった。

その年の秋、祖父は亡くなる。

最期まで何も言わなかった。

結局、分からずじまいだった。

数日経って、齋夜は布団から起きられるようになった。昼は祖父、放課後は陽が、齋夜の祖母の面倒を見て、なんとか事を回していた。齋夜は安逸に過ごしていた。こどもはすぐ横に寝かせてある。そんな姿を見ながら陽は考える。

齋夜は何を思っているのだろう。

いつまでも家の中に子を置いておくわけにもいかなかった。不思議なほどおとなしい赤ん坊だったが、もし泣き出したりしたら、いくら齋夜の家が他の家から少し離れているといっても、いずれは気づかれる。そんな不安にいつまでも怯えているのは、陽は厭だった。

そう思い悩んだ揚句、陽はある時、齋夜にそんな気持ちを伝えた。自分でも、どうしようもなく醜く身勝手な思いだと分かっていた。もしかしたら齋夜が怒り出すのではないかと思いながら、言った。

すると齋夜は、暗くなってからまた来て、と小さく応えた。

夜になり皆が寝静まった頃、陽は齋夜の家に来た。

齋夜は真っ暗な中、白い衣に包んだこどもを抱え、家の前で待っていた。

「行こう」

それだけ言って、齋夜は歩き出した。陽は後からついていった。

齋夜は真っ直ぐ神社の石段へ向かっていく。ためらうことなくそのまま

上っていく。陽も何も言わずに続く。赤ん坊は一声も泣かなかった。そもそも陽はこの子の泣き声を、聞いた憶えがなかった。

生まれたときこの子は、泣いたのだったろうか。

思い出せない。

神社へ着き、裏手に回り、齋夜は迷わずあの路へ進んだ。陽も後を歩く。あの場所へ行くのは、久しぶりだった。

草木に覆われた暗い路を、二人は何も言わず歩く。

幼い頃、齋夜に連れられて初めてあの場所へ行った時のことは、今でも思い出せる。おとなたちは誰も知らない、本当に秘密の場所だった。それがとにかく嬉しかった。広い場所で、誰にも何も言われずに自由に遊べるのだ。それだけで心躍る。何もない場所だけれど、陽たちには何も要らなかった。樹があり、土があり、葉があり、川があった。素晴らしかった。幼い陽は、あの場所が大好きだった。

あの頃は満たされていた。

けれど、陽にはどうしても、その入り口が見極められなかった。

齋夜は路があると言う。そして迷わず入っていく。けれど陽には、それが分からなかった。何度来ても、どうしても分からなかった。だから、一人では来られなかった。

いつも二人が、齋夜と、和月が、一緒だった。

路が開けた。

ここはずっと変わらず、暗く冷たく静かな緑の息で満たされている。

葉の合間から月の光が射す。

齋夜は歩く。陽は入り口で歩を止めた。

子を抱いたままの齋夜は、石のベンチに腰掛けた。陽はその姿を見つめている。

動けなかった。

「来ないの？」

齋夜は囁いた。

陽は言われてようやく気づき、引きずられるように歩いた。齋夜の隣に腰を下ろす。

彼女は足下を、じっと見たきりだった。

何も言わない。
何も訊かない。
陽は息を深く吸った。
ふと自分たちに目を向けると、緑に染まった月の光が身体に落ちていた。
こどもの純白の産着も、同じ光を浴びている。

自分は、何に怯えているんだ？

齋夜は立ち上がった。路の反対側へ歩いていく。
表情は、よく見えなかった。
陽が続くと、齋夜はさらに森の奥へと進んでいく。ここより先はむしろ原生林と呼んだ方がよい深い森で、本当に小さな頃、無防備で無思慮だった頃に行ったきりだった。
あの頃はまだ、和月がいた。
地面がならされていない。湿った朽葉や樹の根に、何度か齋夜は足を滑らせ躓きかけ、その度陽は齋夜を支えた。まだ、充分には回復していなかった。
少し行くと、川がある。町を流れる川の源流である。音も立てずに流れる水は一点の曇りもなく、硬質の美しさを保っていた。
その先には静かな滝がある。湧き出た水がそのまま流れ落ちる。
そしてその脇には洞窟がある。
洞窟の中には、古い小さな社がある。
知っているのは、陽と、齋夜と、そして和月だけだった。
静かだった。
川を越えるとき、陽は手を貸す。齋夜は黙って、その手を取る。
流れに沿って歩き、やがて洞窟へたどりついた。
入る前、陽はふと気づいた。こんな時間に来たのは初めてだから、今までは知らなかった。
月の光が空から真っ直ぐ洞窟の中、社へと注がれていた。
そんな意味があったのか、とだけ、陽は思った。
洞窟といっても、浅く居心地のよい場所である。程よく乾き、程よく湿

った空気で満ちていた。
社もそんな場所だからか、古びた木で出来ているのに、まったく痛んだ様子もなかった。造りが上手いのかも知れない。たぶん神社の本社よりもずっと前から在るのだろう、と陽は思った。
齋夜は洞窟の中に入っていく。陽はそれを入り口の際で静かに待つ。
齋夜は躊躇わず、社の戸を開いた。小さい頃は三人とも、畏れて開けることが出来なかったものだ。
中には何か、古びた法具や布の類がいくつか入っているだけだった。開けてしまえばそれだけだった。
齋夜はそれらを払いのけるようにして、場所を造る。
その中心に、子をゆっくりと置いた。
子は、安らかな顔で眠っている。
陽からは齋夜の後ろ姿しか見えない。
そして齋夜は、戸を閉めた。
わずかにきしむ音と共に、子はその内へ消えた。
齋夜は振り返ると身軽な足どりで洞窟から出てきて、陽の眼を見て小さく言った。
「帰ろう」
その顔は、昔からずっと変わらない、不確かであやうい笑顔で、それを見ると陽は、どうすればよいか分からなくなる。
二人は、何も言わず一緒に帰った。

捨てたわけではなかった。少なくとも陽が高校へ行くまでの間、齋夜は毎日ちゃんとこどもの様子を見に行っていた。母乳は出なかったので牛乳を与えていたようだったけれど、面倒は見ていた。しかし決して、熱心ではなかった。
こどもに付きっきりでいてやりたいと思うほどの熱意も、執着心も、持ち合わせていないようだった。だから世話も、大して苦にはしていなかった。ちょっと行ってちょっとあやして帰ってくる、というだけのことだ。
端から見ている陽にも、彼女が悩んでいる様子は全くうかがえなかった。

それが齋夜の、正直なところのようだった。
子のことを嫌っているわけでもない。一度陽がそのことを問うと、
「かわいい」
とはっきり答えた。
けれどそれはあくまで、あの子はかわいいこどもだ、というだけの意味でしかなかった。確かにあの子は、客観的にいって美しい、かわいいこどもだった。陽もずっとそう感じていた。そして齋夜の言葉は、そう言いたいだけだった。普通言うところの、自分のこどもがかわいい、という含意はない。あの子がたとえよその子であっても、齋夜はそういって褒めただろう。とにかく、かわいいと思うから世話もしてやろうと思ったのだった。
陽はあの夜以来、一度もこどもを見に行ったことはない。
自分もあの子はかわいいと思ったのに、それなのに行けなかった。
何かが、怖かったのだ。
こうして齋夜の生活に、こどもの世話という極めて小さな仕事が付け加えられたが、その他に陽の目から見て、齋夜にはこれといった変化は起こらなかった。祖母の世話の方がよほど大変そうだったので、陽も出来るだけ手伝い、自分が高校の受験勉強に忙しい時には、祖父や母に頼んでいた。
それでも、あの後こどもがどうなったか、陽はまるで知らなかった。訊かなかったし、知らされなかった。いずれにせよ、陽一人であの場所まで行くことは出来ないのだ。そして、それで構わなかった。陽にとって幸いだった。
全てを振り返ってみると、まるで齋夜が酷い、身勝手な人間のようにも取れる。他の人間なら、非難されるところだろう。しかしそうではない。こんなことがあっても、齋夜は何一つ変わらなかっただけだ。陽は分かっていた。
齋夜は無情でも放埒でもない。
ただただ純粋で、それだけだった。

絶えず陽を揺さぶり続けていた。
祖父に告げられて以来のあらゆる出来事が、陽の居場所を奪っていた。

いつでも追われている気がしていた。
そして考え続けた。
いずれ逃げたところに、自分の居場所はあるのだろうか。
幸福になれるのだろうか。
今、灯台から戻った陽は、霧に覆われた石段の前に立つ。
あの場所へ、今なら自分も行けるだろうか。
一段目に、足をかける。

2.

小さな手で、この子はぼくのスカートを掴んだまま離さない。
今まで気づいていなかったけれど、なついてくれていたのかな、と初めて思った。
この子が今よりずっと小さい頃は、今よりもよく様子を見に行った。それでも毎日ではなかった。日によって気が向かないこともある。そんなときは躊躇いなくこの子のことは忘れた。
忘れたかったのだ。
そもそも、死んだっていいと思ったからここに置いたのに。
死んでもいいというのは殺したいというのとは全然違う。殺したいなんて思ったことは一度だってない。
この子は、陽とよく似ている。
でも、もし見に行って死んでいても、仕方ないとは思っていた。もちろん悲しみはしただろう。つらくも苦しくもなるだろう。そしてそれだけだ。どちらでもよかった。
だから、日により気分により、ぼくがしてやることは違っていた。きちんと毎日着替えと食事と飲み物を持って行ってやることもあった。少しあやして遊んでやることもあった。反対に、何日も放っておくこともあった。島は冬にもそれほど寒くはならないけれど、毛布を持っていってやったこともあった。明らかにこの子の体調が悪くても、何もしてやらなかったこ

ともあった。すべてぼくの好きなようにした。

けれど、この子は生き延びた。

死ななかったのだ。

もうすぐ二つになるだろうか。一度も切らず肩まで伸びた髪は、つややかでとても綺麗だった。どこかふわりと不確かでやわらかな表情は、陽にも、ぼくのお母さんにも似ていた。

たぶん、ぼくにも似ているのだろう。

ぼくにくっついて、離れない。

白い着物と黒い髪の間から垣間見える、滑るような首筋に、ぼくは手を当てた。

離れなくなるような、懐かしい暖かみが感じられた。

白い着物に大した意味はない。産着が白かったのは当然だけれど、今着せているのはただ、暗い森の中で目立つような色を選んだだけだ。会いに来たのに見つけられなければ、ぼくが困る。それだけだった。それが思いもしない見方をされて、変な噂が立ってしまった。

いつの間にあんなに話が広まっていたのだろう。最初に陽のお兄さんから聞いたときは、自分の顔が蒼くなるのがはっきり分かった。思わず隣に座る陽に目を遣ってしまった。

ばれて困るのはぼくではない。陽だ。

この子もそんな遠くまで歩けるほどに大きくなっていたのか、と今頃気づいた。いつもこの広場の周りを独りで歩きまわって遊んでいるのだから、普通の子より足腰は強いとは思っていたけれど、町まで降りてくるとは思わなかった。退屈していたのだろうか。一度も誰にも捕まらなかったのは、奇跡に近い。

それとも噂はこの子とは全く関係なくて、勝手に起きたものかも知れない。誰かが言っていたように起き抜けに見間違えたのか、それとも本当に何かがいたのか。ぼくは知らない。いずれにしても、放っておいたらそのうちこの子のことを気づかれてしまう。

気づかれてしまえば、何もかも終わりだ。

陽のお兄さんは、この森はもう必要ない、すべて切り倒すべきだ、とまで言い出した。町会長さんも、そんなことを言う。ぼくには理解できなか

った。森がなくなることが何を生み出すのか、全く分からない。失った以上のものを取り戻すことは、いつどんなときだって難しいものだ。ひどく、難しい。

それに、森がなくなれば、この子も居場所を失う。

なんとかしなければならなかった。

でも、どうしようもなかった。

たとえばこの子が大きくなるどこかの段階で、家に連れ戻せばよかったのだろうか。元々この子が小さくて、いつ泣き出すか分からなかったから、家から連れ出したのだ。結局、ほとんど泣かない子だった。おとなしいこどもなのだから、自分で歩けるようになったら家で育ててもよかったかも知れない。そうした方が、不安はかえって少なかったろうか。

けれど、ぼくはこの子を家に入れる気はなかった。入れればそれは家族と認めることだし、そうなればもう逃げ場はなくなる。

だとするとやはりぼくはこの子が死ぬことを期待していたのかも知れない。

いつの間にか、こんな曖昧な悩みばかりが曖昧なまま、ぼくの周りに長い時間を掛けて少しずつ積み重なっていった。こどものこと、陽のこと、学校のこと、将来のこと、おばあちゃんのこと、どれもずいぶん前から分かっていたはずなのに、ぼくは何も出来なかった。そうしていくうち追い詰められ、今のぼくはどうにもならない場所にいる。

そして、なぜ出来なかったのか、ぼくは今になってようやく思い至った。

何も出来なかったんじゃない。

ぼくは、何もしなかったんだ。

今のまま、前にも進まず後ろへ戻ることもない半端な状態が、いつまでも続いてくれればいいと、このぬるま湯のような心地よさの中、この子はろくに舌も回らない幼児のまま、おばあちゃんも今以上に悪くなることのないまま、島の人たちに何一つ気づかれることのないまま、夏や正月帰ってくるみんなと裏表なく笑いあうことの出来るこの今が、ずっと続いてくれればいいと、そうぼくは思っていた。

いつの日か陽が医者となって島へ戻ってくるのだ、という希望を抱いた今が、今のまま続いてくれればそれがいい。

その日が本当に来る必要はない。

普通に考えれば、きっとぼくの今は大して幸せともいえないだろう。むしろ不幸だといわれるだろう。けれどぼくには、この曖昧な立ち位置と曖昧な思いが一番ふさわしい。

にっちもさっちもいかないところで、遠くに輝く期待を望みながらゆっくりとゆっくりと歩き続ける。

なによりも幸せなことだ。

それがいつまでも、いつまでも続く。

ありえないことなのだけれど、何故か望めば叶うような気がして、叶い得ないと気づいてしまったとき、ぼくはひどく寂しくなる。

スカートが引かれていることに気づいた。こどもがぼくを見上げている。じっと、求めている。

何を求めているか、その眼を見れば分かる。

けれど、まだぼくは待って欲しかった。

自分の進むべき道が、この子一人のせいで何もかも狂いなく定められてしまうことが、怖かった。

ぼくは目を逸らした。

すると諦めたのか、こどもはスカートから手を離すと広場のあちこちを歩きまわりだした。ぼくは少し離れたところから、その様子を見ている。

子は、木の葉や草と戯れている。

そして、中心に生える六本の樹のそばでこどもは立ち止まった。

あの子はしゃがみ込んだ。土を少しかき分けた。

何かをじっと、見つめている。

ぼくは近づき、こどものそばに立つ。

一緒にしゃがみ込むとじっと見つめて、それからぼくは言った。

「かずちゃん、ごめんね」

六本真っ直ぐに生えた樹々の中心の、石造りのベンチにもたれかかるようにして、
かつては白かった着物を着た、かずちゃんの小さな骨は、今も横たわっている。

気づいたのはこの子が産まれる前、夏だった。
日に日に疲れが増していた。一人静かになろうとここへ来て、ベンチに座ったぼくは、土から汚れた布の端を見つけた。ぼくは手で、土をかき分けた。
掘り出すのにそう時間は掛からなかった。小さな身体だ。
やっぱり、かずちゃんはここに来ていたのだ。
その骨を見て、
ぼくは気が遠くなるのを感じた。
お祭りの後何かにいざなわれたか、森に迷い込んだかずちゃんは、ここまで辿り着いて、
そして、それならそれは、ぼくのせいだ。
この場所を教え、一緒に遊んだ、ぼくのせいだ。
ぼくは何も考えないまま、骨を土で覆い隠した。
立っていられないほどの強い目眩を感じた。
そうして家に帰ってから倒れ、翌日、陽と大先生がやってきたのだ。
陽にも言えなかった。自分でも無意識のうちに何とか忘れようとしていた。
怖かった。
ぼくのせいだ。

十一年前かずちゃんがいなくなった後、ぼくは熱を出して、ずっと探しに来られなかった。治ってからも、ここに来ればかずちゃんのことを思い出すからと、やっぱり来られなかった。夏が過ぎれば秋になり、積もる落ち葉が何もかもかき消してしまう。気づけなかった。
陽もここで何度も一緒に遊んだけれど、ここへはいつもぼくの後につい

てきていたから、一人で探しに来ることは出来なかったろう。やっぱり全部、ぼくのせいだ。

なによりここは、お父さんとの大切な秘密の場所だから、

ぼくと、陽と、かずちゃんだけの場所だから、

ずっと誰にも言わなかった。

だからかずちゃんは、いつまでも見つからなかった。

それも、ぼくのせいだ。

杜さんがああなってしまったのも、ぼくのせいだ。少し前ならせめて、教えてあげることが出来た。あるいは骨を届けてあげることが出来た。でも今はもう無理だ。この子がいる。

この子を連れて行く場所は、どう考えてもここしかなかった。仕方がなかった。幸い陽は、この子を連れて一緒にここへ来たときも、骨には気づかなかった。一緒にベンチに座ってもどこか上の空で、結局気づかなかった。でも、それでよかったと思う。陽まで苦しむ必要はない。

骨になったかずちゃんが見つかれば、どうしたって森に目がいってしまうだろう。そうすれば本格的に森を調べる人も出てくるだろう。いや、森がなくなってしまうかも知れない。この子が見つかってしまう。

だから、ぼくは隠し通すしかなかった。

それ以来いつここへ来ても、

ぼくはあの子に会い、

そしてかずちゃんに会った。

それがずっと続く。

続く。

やっぱりぼくには、何も出来なかった。

骨になった友達との再会と、言葉の通じないこどもとの無為な会話が、幾度も幾度も繰り返される。

この場所は、ぼくに不思議な夢を植え付ける。

今も、

昔も、

空虚な無力と奇妙な幸福がまつわり、ぼくに恒久の安寧への幽かな期待を抱かせた。
ずっと今が続く、夢だ。
家に帰れば祖母と生活とあらゆる現実がぼくにまとわりつき、ここへ来れば骨とこどもとあらゆる夢がぼくを縛り付ける。
右へ揺れ、
左へ揺れ、
そんな毎日が終わらない。
もうどうすればいいのか、
分からなかった。

助けて。

ぼくは、何かを振り払うように立ち上がった。
こどもはしゃがんだまま、ぼくを見上げている。
小さな口はまた、今にもぼくに話しかけようとしている。
何をすればいいのか、もうぼくには分かっている。
でも怖かった。
怖いんだ。
子は言った。

「おかあさん」

陽。

そのとき、
気配を感じてぼくは振り返った。

すぐ後ろに立っていたのは、

陽だった。

3.

どうやって来たのだろう。分からなかった。
あの路へは、ぼくしか入ることが出来ない。
あやまてば、戻ることの出来ない森へ彷徨い込む。
それなのに陽は、どうして、ここへ、
ここへ、
すると、陽は言った。
「　　」
ぼくは、陽を呼ぶ。
「陽」
陽はぼくを、見ている。
どうして、ここへ、
そう思いながらもぼくは、何も考えることが出来なかった。
陽は口を閉ざしたまま、身じろぎもせずに立っている。
ぼくは何も考えることが出来ない。
そのまま時間が経つ。
何一つ音は聞こえなかった。
ふと陽はこどもに気づき、悲しみとも喜びともつかない息苦しいような、
切なげな表情を浮かべた。陽がこの子を見るのはほんの赤ん坊の時、ぼく
がここへ置いていって以来のはずだ。
陽は、何を思うだろうか。
もちろんこの子は、何も知らない。ぼく以外の人をまともに見るのも、
たぶん初めてだ。いつもと同じように、幼い口を薄く開け、やわらかな目
つきで陽と見つめ合っている。
陽は、何を思うだろうか。
それから陽は、ぼくに目を戻すと、
もう一度、ゆっくりと言った。
「　　」

何も聞こえなかったけれど。
なんとなく、言っていることは分かった。
ぼくもまた、ゆっくりと頷いた。

そうだ。
もう、時は来ている。

これは諦めなのか、
それとも始まりなのか、
今は分からない。
いつ分かるとも知れない。
けれど、行かなければならない。
陽も来てくれたのだ。
陽は、すぐそばにいてくれる。
今、ぼくを助けてくれる。
陽が何を思うのか、それは分からないけれど、
いつでもぼくを、助けてくれるだろう。

こどもは立つと、呟くような小さな声でまた、ぼくに向かって幽く言った。
「おかあさん」
うん。
分かっているよ。

もう時間だ。

ぼくは静かに土へ膝をつく。
森は風に揺れる。
土の薫りが立ち昇る。
草の香りが胸に満ちる。
誰も知らない昔からずっと続いてきた緑は、薄く広がる霧の中、涼しく

静かに生え、流れる川は始めから終わりまで、音もなく下る。
ぼくはこどもと同じ目の高さになると、見つめ合う。
こどもは言った。
「おかあさん」
ぼくは応えた。
「おいで」
こどもは骨のそばからぼくへ向かって小さな、小さな足で歩いてくる。
ぼくが家で見つけてきた、ぼくのこどもの頃の靴を履いて、
目の前までやってくると、

ぼくはこどもを、抱きしめた。

強く、許される限り強く抱きしめた。
そしてぼくは言う。

「ごめんね」

こどもにしかない、暖かで懐かしい匂いがした。
嘘のように柔く、どこかへ消えてしまいそうな優しい手触りで、
きっとぼくはもう、離すことが出来ない。
「ごめんね」
こどもは、しがみつくようにぼくの背中へ手を回した。
そうしてぼくに言う。
「なかないで」
ぼくは、涙を流した。
もう泣けないと思ったのに、
涙は止まらなかった。
ぼくは子の耳元で囁く。
「ごめんね」

すると、

後ろから声が聞こえた。

「夜」

ぼくは振り返らない。

「え？」

まだ、振り返らない。

「ま、話たがか」

もう少しだけ、

「そした、迷ずこに来れ」

ここにいさせてください。

「も、終わう。う、帰、間だ。さあ」

ぼくはもう一度だけ、
この子を強く抱きしめた。
ありがとう。

さようなら。

そして、
優しい声が聞こえた。

「齋夜。帰ろう」

ぼくは、
いや、
わたしは、
救われた。
そう思った。

わたしは、立ち上がる。
膝についた土を払い、振り返る。
そこには、陽がいる。
何も言わず、わたしを優しい目で見つめている。
陽の笑顔を見ると、
わたしはいつも、
どうしようもない気持ちになる。
陽は何も言わないままわたしのそばまで来ると、
わたしを強く、抱きしめた。
わたしも、陽の肩に手を回す。
涙が止まらなかった。
わたしたちのこどもはそっと、
わたしの服の裾を掴んでいた。

もう何もかも、終わってしまったのだ。

森はどこまでも静かで、
霧は土と葉の中へ帰っていき、

鈴虫の鳴く声が聞こえる。
雲が別れ引いていった後には、
月があった。

月の光は広場を、緑に照らしていた。